

2015年度 国際キャリア開発プログラム
「合宿セミナー」

国際キャリア開発 事前学習資料集

主 催：大学コンソーシアムとちぎ、宇都宮大学
協 力：白鷺大学
後 援：(公社) 栃木県経済同友会、(公財) 栃木県国際交流協会、
NPO 法人宇都宮市国際交流協会、いっくら国際文化交流会、JICA 筑波
協 賛：(一財) 栃木県青年会館、(公財) あしぎん国際交流財団、
キリンビールマーケティング(株) 栃木支社



国際キャリア開発プログラム委員会 委員長
国際学部国際社会学科 教授

重田 康博



宇都宮大学、大学コンソーシアムとちぎ、そして全国の大学生、社会人の皆さん、国際キャリアについて考えたことがありますか。

大学時代に、就職活動に入る前に、国際キャリアのプログラムに参加してみたい、国際的な問題に対応する職場や海外で国際インターンをしてみたい、あるいは今、政府、企業、大学で叫ばれている、「グローバル人材」の育成のためのプログラムに参加してみたいと思う方がいるかもしれません。

そのように考えている皆さんのニーズに応えるのが、グローバルマインドを養う「国際キャリア開発プログラム」です。本プログラムは、宇都宮大学国際学部や栃木県の大学が中心になって 2004 年から毎年実施され、参加者数は過去 11 年間合計 1263 名（宇都宮大学で 600 名、他大学等で 663 名）となっています。

このプログラムの科目は、学生が働く意味やキャリア教育について考える「国際キャリア開発」、英語で全て授業を行う「国際実務英語」、国内や海外の企業、公的機関、NGO・NPO でインターンシップを行う「国際キャリア実習」の 3 科目、6 単位で構成されています。いずれも夏季と春季の休業期間に行い、講義は 1 科目 2 泊 3 泊の集中合宿方式で、キャリア実習は 80 時間で行います。本年度からは、新たに共通テーマを「グローバル化時代の地域とキャリア」とし、「地域からのグローバル化(Globalization)」、「地域のグローバル化(Glocalization)」の 2 つの柱を立て、国際ビジネス、国際協力・国際貢献、多文化共生と日本、異文化理解・コミュニケーションの 4 つのテーマで分科会を構成します。講義ではその道のプロの専門家や講師を揃え、実習では国内・海外で魅力的で個性的な研修先を用意しています。3 科目すべての実習を勧めますが、選択的な受講も可能です。

「国際キャリア開発プログラム」は、毎年宇都宮市や栃木県内だけでなく、全国から大学生、社会人が多数参加します。皆さんもこのプログラムに参加して、国際キャリアについて一緒に学び、国際社会や地域社会への「キャリアパス」の可能性を探っていきましょう。

最後に、本プログラムは、大学コンソーシアムとちぎとの共同事業として企画しましたが、その実施に際しましては、白鷗大学からご協力をいただいたほか、(公社)栃木県経済同友会、(公財)栃木県国際交流協会、NPO 法人宇都宮市国際交流協会、いっくら国際文化交流会、そして、JICA 筑波からご後援をいただきました。また、(一財)栃木県青年会館、(公財)あしぎん国際交流財団、そして、キリンビールマーケティング(株)栃木支社からはご協賛をいただきました。ご関係の皆様からの多大なご理解とご支援に対し、主催者を代表して、厚くお礼申し上げます。

●実施要綱

- 1) 科 目 名 : 国際キャリア開発～2015年合宿セミナー～
- 2) テ ー マ : グローバル時代のキャリア形成を考える
- 3) 日 程 : 2015年8月29日(土)～2015年8月31日(月) <2泊3日>
- 4) 会場・宿泊 : コンセーレ(栃木県青年会館)
<所在地> 〒320-0066 宇都宮市駒生1丁目1番6号
<問合先> TEL: 028-624-1417
<URL> <http://www2.ocn.ne.jp/~concere/access.html>
<地図>



- 5) プログラム : 2頁を参照
- 6) 参加定員 : 60名
- 7) 参加費 : 10,000円(食費・宿泊費を含む)
- 8) 問合せ : 宇都宮大学国際学部 事務室(5号館A棟1階)
担当 : 山口
<所在地> 〒321-8505 宇都宮市峰町350
<問合先> TEL: 028-649-5172 FAX: 028-649-5171
E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

●プログラム（敬称略）

1日目（8月29日 土曜日）

時 間	内 容
09:00～09:30	受付
09:30～09:45	開講式・オリエンテーション
09:50～12:00	全体会（全体講義・ワークショップ）
12:00～12:50	昼食
13:00～13:20	趣旨説明（分科会および全体発表のプレゼン方法の説明など）
13:20～15:20	パネルトーク「グローバル時代におけるキャリア形成について」
15:50～17:50	分科会 1
	分科会「国際ビジネス A」 講師：益子博美
	分科会「国際協力・国際貢献 B」 講師：湯本浩之
	分科会「国際協力・国際貢献 C」 講師：成田由香子
	分科会「国際協力・国際貢献 D」 講師：清水麻衣子
	分科会「多文化共生と日本 E」 講師：若林秀樹
	分科会「異文化理解・コミュニケーション F」 講師：加藤佳代
17:50～18:30	チェックイン（事務局担当者より鍵を受領）
18:30～20:00	夕食・交流会

2日目（8月30日 日曜日）

時 間	内 容
07:30～08:20	朝食
08:30～12:00	分科会 2
12:00～12:50	昼食
13:00～15:30	分科会 3
15:30～17:30	分科会 4（分科会まとめ・中間発表準備）
17:30～18:30	中間発表
18:30～19:30	夕食
19:30～21:30	全体発表準備

3日目（8月31日 月曜日）

時 間	内 容
07:30～08:20	朝食
09:00～10:00	発表準備
10:00～12:20	全体発表
12:20～13:10	昼食
13:20～15:00	振り返り／意見交換／全体総括／アンケート記入
15:00～15:15	閉講式
15:30～	バスで宇都宮駅・宇大に移動・解散（現地解散も可）

今求められるグローバル人材とは？

☆講師プロフィール

氏名：田巻 松雄（たまき まつお）

所属：宇都宮大学国際学部長

略歴：

1956年生まれ。宇都宮大学国際学部長。筑波大学大学院社会科学研究科修了。社会学博士。1996年より宇都宮大学国際学部に勤務。

2008年、国際学部が地域の国際化を推進する教育研究拠点として開設した多文化公共圏センターの初代センター長に就任。現在、外国人児童生徒支援を目的とする宇都宮大学HANDSプロジェクト研究代表を務める。



全体講義の概要

「グローバル人材」と聞いて、皆さんはどんな人材を思い浮かべるでしょうか。

日本で「グローバル人材」ということばが広く使われ始めたのは4、5年前のことです。平成22～23年にかけて、「グローバル人材育成」について話し合う国レベルの会議がいくつか開催され、報告書が出されました。会議の開催趣旨としては、「我が国の成長を支えるグローバル人材の育成とそのような人材が育成される仕組みの構築を目指し、とりわけ日本人の海外留学の拡大を産学の協力を得て推進する」と書かれています。また、「日本企業のグローバル化を推進することが、激しさを増す国際的競争環境のなかで日本が生き残る条件」であり、そのためには「海外市場（特にアジアの新興国市場）に目を向ける必要性があるが、企業のグローバル化を推進する役割を担う国内の人材不足が深刻化している」とも書かれています。グローバル人材は Global Human Resource とされていますが、強く意識されているのが、日本企業のグローバル化を担う「外向き」の人材であることは明らかです。そして、グローバル人材育成を目指すべき高等教育における最重要課題は、若者の「内向き志向」の解消であり、海外でのグローバルな環境で活躍するための語学力や異文化理解・活用力の要請とされています。

経済やビジネスの世界でグローバルに活動・活躍する人材の育成はとても重要なことです。ただし、「グローバル人材」の育成は、経済やビジネスに加えて、社会・文化・政治の分野でも求められています。そして、日本国内の地域と海外の地域の両方に目を向ける必要があります。つまり、グローバル化に伴って生起する国際社会・地域社会の諸課題を発見・分析し、様々な人間同士の共生の視点から創造的な地域の発展に貢献できる人間力を持つ人材の育成こそがより問われていると言えるでしょう。換言すれば、日本の各地域において国際的な社会・経済・文化・政治の共生に関して活動を広げる「地域のグローバル化」

と日本の各地域から社会・経済・文化・政治に関連して世界の各地に活動の場を拓げる「地域からのグローバル化」に向き合うことが出来る人材の育成が求められているのです。

当日は、以上のことを踏まえて、最近意識しているグローカルリーダーやグローバル・コンピテンシーの言葉に引きつけて「今求められるグローバル人材」についてお話したいと思います。ここでの最後に、グローバルな課題発見力や課題解決力を発揮する人間の活動力について若干課題提起しておきましょう。ハンナ・アレントは、条件づけられた人間が環境に働きかける内発的な能力、すなわち「人間の条件」の最も基本的要素となる活動力を、＜労働＞（labor）、＜仕事＞（work）、「活動」（action）の3つに分類して考察しています。グローバルな課題・問題に向きあう行為は「仕事」だけではありません。普段何気ない行為の中にもグローバルな課題・問題に向き合えることがあることについても言及したいと考えています。

事業を立ち上げよう！インバウンドのお客様に、どう「おもてなし」をする？

☆講師プロフィール

氏名：益子 博美（ますこ ひろみ）

所属：株式会社花のギフト社 代表取締役社長

略歴：

日本フローリスト養成学校卒業後、渡米。オクラホマ州の生花店に勤務し、アメリカのギフト（フラワーバルーンや Xmas 装飾等）に触れた。



帰国後は、老舗「花重」でフローリストとしての経験を積みながら、故・関江重三郎先生のアシスタントとしてアジア各地を訪問（フラワーデザインレッスンの為）。また、日本フローリスト養成学校でアシスタントも務め、講師としての経験も積む。25歳の時、渡豪。オーストラリアのワイルドフラワーに触れ、自然の花の美しさを学ぶ。

帰国後、フラワーデザイナーとして雑誌やメディアの仕事をこなす傍ら、2001年、AIFDの資格を取得。2002年には、銀座にフラワースクール兼ショップ「ateria Masubo」をオープン。2003年（株）花のギフト社入社。2015年から同社の代表取締役社長を務める。

1. 仕事の内容・研究テーマ

我社はお花に関するギフト商品を全国へ通信販売の形で販売しています。お客様はアマゾンや楽天等のネット経由の個人のお客様と、デパートやコンビニ、GMS等、法人のお客様といらっしゃいます。ただ、お花のギフトを売るではなく、どこにもないオリジナル商品作り、お客様が本当に欲しい商品作りに力を入れています。最近では、生花やプリザーブドフラワー等に顔写真やメッセージ等を印刷したフラワープリントにも力を入れ、オンラインギフト作りをしています。

2. キャリアパス

高校卒業後、働きながら花の専門学校へ行く。卒業後、20歳の時渡米しオクラホマ州のお花屋さんで半年間働く。日本とアメリカの違いに度々驚き、多くの刺激と感動を受けて帰国。帰国後、日本で戦後フラワーデザインを広めたデザイナーの一人に師事。その師のアシスタントとして、アジア各地を訪問。日本とアジア各国の違いに衝撃を受けた。花の学校のアシスタントとしては、年に2回あった来訪した欧米フラワーデザイナー達の、デモンストレーションやレッスンのアシスタントをしたりした。大きな会場でのデモンストレーションの準備や外国人デザイナーの接待を通し、多くのことを学んだ。

25歳の時、もう少し英語に触れたいという理由で、ワーキングホリデービザを取り渡豪。花関係だけでなく、色々仕事をした。一番印象に残っているのは、遠洋漁業に日本から来

たマグロ船の船員さん達に、お土産品を売る仕事だった。ワイルドな環境で過ごした時期もあり、生き抜くということを考えてこともあった。

帰国後は独立することを考え、がむしゃらに働いた。様々な方のおかげで、31歳の時、銀座5丁目に自分のショップをオープンした。ちょうどこの頃、今の栴花のギフト社社長の野上耕作氏に会い、当時「一流のデザイナーになる」ことが夢だった私に、「君の夢は小さい。僕だったら、一流のデザイナーを何人も雇える経営者になる」と言われ、衝撃を受け、銀座のショップはスタッフに任せ、栴花のギフト社に入社した。栴花のギフト社は小さな会社だが取引先が全国にあり、やりがいのある毎日を送っている。現在、栴花のギフト社が考えたオリジナル商品が各社で幾つも販売されている。今後もお客様をあとと言わせる商品作りをしていきたい。

追伸： 2001年にAIFDの資格を取得

AIFDとは…American Institute of Floral Designersの略

アメリカの花業界でもっとも権威のあるフローラルデザイナー協会のこと。その協会の認定試験に合格したデザイナーのみ名乗れる称号。アメリカのフラワーデザイン界では一流の称号。現在日本では約40名のフラワーデザイナーが資格を取得しています。

3. 分科会の内容

我社は、お花を中心にしたオリジナルギフト商品を作り、様々なお客様に販売しています。商品を作り販売する際、たくさんの商売があること、たくさんの方々がいらっしゃることに毎回驚いています。ビッグネームの会社の方から、たった一人で経営されている方まで…実に様々です。

そんな中、実に多くの社長様にお会いしています。皆さん、色々な理由から起業され今に至っています。企業は簡単にできますが、それを維持経営していくことは至難の業ではありません。しかし、始めなければチャンスは生まれません。

現在外国人観光客も増え、2020年のオリンピック・パラリンピックに向けてチャンスが広がっています。今回は、外国人観光客に何か新しいビジネスを始めてみませんか？

4. キーワードリスト

おもてなし	オリンピック・パラリンピック効果	メイドインジャパン
損益分岐点	収益化	3C分析
		企業理念

5. 事前予習課題

分科会に参加するまでに、どんな商売を始めたいのか、またはどんなことに興味があるのか、ざっくりで良いので考えてきてください。

ゼロから起業され、今現在すばらしい会社を運営されている方々がたくさんいらっしゃいます。カンブリア宮殿のホームページに少しだけ載っています。ぜひ見てみてください。

何のための国際協力：“援助”の功罪と“寄付”の是非を考える

☆講師プロフィール

氏名：湯本 浩之（ゆもと ひろゆき）

所属：宇都宮大学

留学生・国際交流センター 准教授



略歴：

大学卒業後に在中央アフリカ共和国日本大使館に在外公館派遣員として2年間在勤。帰国後、NGO活動推進センター事務局次長、開発教育協会事務局長、立教大学文学部特任准教授などを経て、現職。

1. 仕事の内容・研究テーマ

「開発教育」って聞いたことがあるでしょうか。「教育」とは言っても、学校の授業の中で行われてきたものではないので、聞いたことのある人は少ないでしょう。私がこの言葉に出会ったのは、今から20数年も前のことになります。以来、市民組織（NGO/NPO）の専従スタッフとして、市民による国際協力活動や「開発教育」と呼ばれる教育活動の普及推進を長く仕事としてきました。そのため「ご専門は何ですか？」と問われれば、「国際教育論（開発教育やグローバル教育）」や「市民組織論（NGO/NPO やボランティア活動）」と答えるようにしています。

私にとっては、いわばライフワークとも言える「開発教育」ですが、もともとは1970年代に欧米で始まった教育活動です。その当時“第三世界”と呼ばれていたアジアやアフリカなどの「南」の国々や地域では、多くの人々が深刻な飢餓や貧困に苦しんでおり、各国の政府やNGO、そして国連などの国際機関が国際協力に取り組んでいました。ところが、一部の国連機関や欧米のNGOが、ただ海外に援助金や援助物資を送るだけではなく、「南」の過酷な現状や問題を“援助する側”にいる欧米諸国の人々に伝え、国際協力や国際貢献のあるべき姿を考えていくための活動を始めたのです。こうした活動がやがて様々な教育現場でも行われ、「開発教育」と呼ばれるようになったのです。

研究テーマとしては、英国を中心とする欧州における開発教育やグローバル教育の歴史研究や政策研究のほか、これら教育実践の中で重視される「参加型学習」と、住民主体のコミュニティ開発の現場で注目される「参加型開発」との比較研究を試みています。今日、日本の教育や学校・大学のあり方がますます厳しく問われるようになってきました。伝統的な教育学や教育制度の枠組みの外で研究や実践が進められてきた「開発教育」や「参加型学習」の知見や経験の中に、今後の教育改革や学校・大学改革に向けたヒントを見つけないと考えています。

2. キャリアパス

今でこそ大学に職を得ている私ですが、初めから大学教員を目指していたわけではありません。過去 20 数年余り、市民組織（NGO/NPO）の職員や役員として仕事をしてきましたが、そこでの実務や実践の延長線上に今の私があります。現在に至るまでの私のキャリアを紹介します。

<1980 年代：20 代>

英語の教員を志望して某大学の英文学科に一浪の末に入学。ある青少年団体でのボランティア活動に没頭。小中高生を対象に、夏休みは海や山での野外キャンプ、冬休みと春休みはスキー・キャンプなどを企画運営。大学 4 年の夏から 1 年間休学。ある民間団体を通じて、米国オハイオ州に派遣。現地のキャンプ場でボランティア・スタッフとして活動。

大学卒業後、外務省在外公館派遣員として、在中央アフリカ共和国日本大使館に 2 年間に在勤。最貧国の過酷な社会状況や日本の ODA（政府開発援助）の現実を目の当たりにする。

帰国後、再就職のため JICA（当時の国際協力事業団）の中途採用や某 NGO の海外駐在員に応募するも不採用。しかし、ある 1 本の電話がきっかけとなり NGO の世界に足を踏み入れる。

<1990 年代：30 代>

当時の NGO 活動推進センター（現在の NPO 法人国際協力 NGO センター）で、調査研究や政策提言、国際会議や「全国 NGO の集い」、職員研修や市民講座、広報やマスコミ対応などを担当。1996 年、NGO の立場から教育に関わりたいと当時の開発教育協議会（現在の NPO 法人開発教育協会）へ転職。政策提言や調査研究、教材開発や各種研修などを担当。国際協力や国際理解をテーマとする研修会や市民講座の講師として、全国各地を飛び回る。

<2000 年代：40 代>

NPO 法人の事務局長としてマネジメント業務に追われる一方、大学・大学院から「NGO/NPO」や「ボランティア」、あるいは「開発教育」や「総合的学習」などをテーマとした非常勤講師の依頼が増加。大学教育における開発教育や参加型学習の可能性に関心が募る。大学院に入学し教育学を専攻。博士課程を中退して、立教大学の特任教員（5 年契約）に採用される。

<2010 年代：50 代>

宇都宮大学に着任。基盤教育科目「ワークショップで学ぶ変わりゆく現代社会と私たち」、国際学部専門科目「グローバル教育論」のほか、「国際キャリア開発」や「国際キャリア実習」などを担当することに。

3. 分科会の内容

最近では、国際協力に関わる市民組織（NGO/NPO）の活動に参加する学生や社会人が少なくありません。将来、国連機関や政府機関で国際協力に関わりたいと考えている人もいるでしょう。しかし、気候風土や生活様式をはじめ、言語や宗教、価値観や人生観などを異にする人々とともに、私たちが活動することは決して容易なことではありません。海外の現場では、日本社会での常識や通念が覆されるのはもちろん、“援助する側”の善意や熱意が逆効果を生んでしまうことすら起こりえます。国際協力や国際貢献の必要性を語るこ

とは簡単ですが、過去の歴史を振り返れば、“援助”の功罪や“寄付”の是非が議論されてきました。

この分科会では、このような問題意識から出発して、国際協力や国際貢献、“援助”や“寄付”をめぐる問題点や課題に着目しながら、今後この分野に関わっていく上での各自のキャリア形成の課題について検討したいと思います。分科会の進行は、概ね以下の通りです。

- 分科会 1 : 参加者の自己紹介や問題意識の共有。
ワークショップ 1 「される側から見たボランティア」
- 分科会 2 : ワークショップ 2 「“援助”する前に考えよう！(1)」
ワークショップ 3 「“援助”する前に考えよう！(2)」
- 分科会 3 : ワークショップ 4 「今後のキャリアを考える：私にできること、したいこと」
- 分科会 4 : 中間発表準備

※ワークショップの進捗状況によって、内容を一部変更する場合があります。

4. キーワードリスト

- 1) ODAとNGO
- 2) 国際協力と開発教育
- 3) 参加型開発と参加型学習

5. 参考資料等

日本の国際協力や国際交流の現状や課題を概観し、これらの分野を担ってきた関係者の体験や今後の人材への期待や課題を紹介した入門書として、毛受敏浩・榎田勝利・有田典代監修の「国際交流・協力活動入門講座Ⅰ～Ⅳ」（発行：明石書店）を紹介します。

- 第Ⅰ集『草の根の国際交流と国際協力』（2003年）
第Ⅱ集『国際交流の組織運営とネットワーク』（2004年）
第Ⅲ集『国際交流・国際協力の実践者たち』（2006年）
第Ⅳ集『「多文化パワー社会」：多文化共生を超えて』（2007年）

6. 事前予習用リーディング課題

(<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/>からダウンロード可)

- 湯本浩之「NGO/NPOで働くということ：知ったことを伝えるために」有田典代編著『国際交流・協力活動入門講座Ⅲ：国際交流・国際協力の実践者たち』明石書店、2006年、pp.175-194。

国際協力 NGO の役割、NGO で働くということ。

あなたにとって心を動かす仕事とは？

☆講師プロフィール

氏名：近藤 光（こんどう あきら）

所属：特定非営利活動法人 ACE

子ども支援事業担当（ガーナ事業担当）

略 歴：

名古屋大学大学院国際開発研究科修了（学術修士）後、青年海外協力隊（村落開発普及員、ガーナ・ウガンダ）にて参加型開発、保健衛生にかかわる活動を行う。その後社団法人国際農林業協働協会にて嘱託職員として、「アフガニスタン国国立農業試験場再建計画プロジェクト（JICA との業務実施契約）」の業務調整、国内支援の業務にかかわる。同嘱託終了後、株式会社オリエンタルコンサルタンツが受注する「ウガンダ国第二ナイル架橋詳細設計案件」の業務調整員として 1 年間同プロジェクトにかかわる。その後 2012 年 4 月より現職。おもな担当はガーナのカカオ生産地域における児童労働撤廃のためのプロジェクト（スマイルガーナプロジェクト）の運営管理の他、学校などでの講演・啓発、政府などへの政策提言（アドボカシー）にもかかわる。2014 年 3 月より NGO ネットワーク組織「市民ネットワーク for TICAD（アフリカ開発会議）」の世話人を務める。



1. 仕事の内容・研究テーマ

学生時代は「アフリカ政治」「途上国における民主化」「国際関係」を専門とし、「ナイジェリアの民主化と国際関係」をテーマとした修士論文を作成しました。その後実務や現場経験を通じ、「村落開発」「開発プロジェクト業務調整」「開発プロジェクト管理」などの業務を行ってきました。現在は「児童労働を無くす」ための「プロジェクト管理」のほかに、支援者への報告、学生・市民への講演、ファンドレイジング（資金獲得）、政府等へのアドボカシー（政策提言）活動なども行っています。さらには「人権」「ガバナンス」「フェアトレード」「エシカル商品」「人間の安全保障」などに関心を持ち始めています。

2. キャリアパス

実は私は新卒ですんなり就職できたわけではありません。留年し、内定が取り消され、結局そのあとは「放浪」するように NGO のインターンと大学院進学、また NGO のインターンをしまして、30 歳になってようやくそれらしいキャリアが始まりました。

青年海外協力隊時代（2004 年～2007 年）

1) ガーナ・村落開発普及員（2 年間）

初めて「現場」見たのがこれ。正直「成果」というものはほとんどない。現地の人々と同

じ事務所で、人々が暮らしている場所を「じかに」「長期間」目と肌で感じたことが最大の収穫であった。ただし「おれはもうアフリカのことはなんでもわかっている」と勘違いしてしまった。それがのちに大きなしっぺ返しを食らうこととなる。

2) ウガンダ・村落開発普及員（2年間）

「経験者」として2回目の協力隊に参加したが、実際には経験を生かすどころかさらなる失敗を重ねてしまった。現場というものがいかに「局部的」で、決して「現地の人々以上に分かることはない」ことを強く実感した。同時に「謙虚さ」というものがいかに大切かを実感した。

開発コンサルタント時代（2008年～2011年）

1) 公益法人（農業関係）：業務調整/国内支援・アフガニスタン

人生で初めて雇用保険・厚生年金を受ける仕事はこれ。アフガニスタンで農業関係のプロジェクト。「報告書作成」「機材調達」「精算報告」など、さまざまな国際協力の「雑務」を経験する。また1ヶ月間における現地滞在中を通じ、「紛争地帯」における業務（安全対策等）を経験する。

2) 土木コンサルタント会社 業務調整/現地駐在 ウガンダ

橋の設計にかかるプロジェクトの業務調整。唯一の「民間株式会社」での業務経験。ウガンダの政府担当者とのやり取りを通じ、アフリカの政府や行政関係者との仕事とは何かを経験する。またアフリカでの事務作業や行政手続きなど、途上国の行政システムの現実を垣間見る。

NGO職員時代（2012年～現在）

1) 特定非営利活動法人 ACE 国際協力事業担当（ガーナ事業担当）

1年に3回、2~3週間ずつの日程でガーナのプロジェクト地を訪問し、モニタリングやカウンターパート団体と協議を行う。また日本の支援者への報告のため撮影や下地の人々へのインタビューを行う。この経験を通じ、草の根に人々や政府・行政関係者とは異なる開発協力業務従事者と交流するようになり、多くのことを学ぶ。とはいえまだまだ自分自身「効果的な仕事」ができるには至っていない・・・

3. 分科会の内容

これまでのキャリア形成について紹介し、そこで何を学び感じたか、なぜそれを選んだか、苦労したこと、良かったことなど、大学生の今後の人生設計を決める上で少しでも参考になることがあればよいと考えています。

また現在勤務するNGOの概要として組織や活動・戦略、児童労働問題、担当する海外プロジェクトの内容や実施手法、課題や意義などを紹介し、国際協力NGOの役割などを考えます。

さらに、日本の個人・学校・NPO・企業などによる連携事例を紹介し、日本でできるグローバルな社会課題への取り組みについても一緒に考えます。

4. キーワードリスト

国際協力、プロジェクト、自立、子どもの権利、児童労働

5. 参考資料等

- 「いのち・開発・NGO」ディヴィット・ワーナー、ディヴィット・サンダース著、池住義憲、若井普 監訳、新評論
- 「参加型開発による地域づくりの方法」PRA 実践ハンドブック、ソメシュ・クマール著、田中治彦監訳、明石書店
- 「国際協力プロジェクト評価」NPO 法人アークス編、国際開発ジャーナル社
- 「NGO 大国インド」斉藤千宏著、明石書店
- 「わたし 8 歳、カカオ畑で働き続けて」岩附由香、白木朋子、水寄僚子、合同出版

6. 事前予習用リーディング課題

(<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/>からダウンロード可)

- 「わたし 8 歳、カカオ畑で働き続けて」岩附由香、白木朋子、水寄僚子、合同出版
第 2 章 P31-37、第 4 章全て、第 5 章全て、第 6 章 P97-110、第 7 章 P115-119

国際協力業界への第一歩

～「私のキャリア・ストーリー」を描こう～

☆講師プロフィール

氏名：清水 麻衣子（しみず まいこ）

所属：元国連開発計画（UNDP）

ザンビア事務所 プログラム・アナリスト

略歴：

民間企業に勤務後、NGO へ転職しアジア各地の選挙監視活動に従事。その後、在東ティモール日本大使館専門調査員、国連開発計画ザンビア事務所プログラム・アナリスト、同駐日代表事務所コンサルタント等を務める。ロータリー財団世界平和フェローとして豪州クイーンズランド大学国際学修士号（平和と紛争解決専攻）取得。



1. 仕事の内容・研究テーマ

専門分野は、平和構築、ガバナンス。また、これらの分野でのプロジェクトやプログラムの立案、実施管理、モニタリング評価等。平和で公正な社会をつくる為の側面支援を行う上で、現場でカウンターパート（受け入れ担当者）と顔を合わせ共に課題に取り組むことが仕事の醍醐味だった。これまで NGO、国、国連などで「支援」という枠組みを通して途上国と関わってきたが、最近では、ビジネスを通じた関わりにも興味を広がりつつある。

2. キャリアパス

《きっかけ》 中学・高校時代にカンボジアで選挙支援に携わる日本人国連職員の活躍に関する報道に接し、国連のような場で平和をつくる仕事をしたいと漠然と考えるようになった。

《大学進学》 大学は国連職員を多く輩出しているところを選んだが、進学すると周りには国連で働きたい人達だらけ。国連で何をしたいのかを問われたが、答えに詰まる。大学では、国連公用語の一つである仏語を第2外国語として選択し、大学4年次にフランスへ留学。

《民間企業時代》 フランスから帰国した大学5年次、他の学生より遅れて就職活動開始。卒業後、ソフトウェア企業に就職、経営企画部門に配属。海外 IT ベンチャー企業との販売代理店契約交渉、社内ベンチャー制度立ち上げなどに携わる。そんな折、「インターバンド」という NGO がパキスタンでの選挙監視ボランティアを募集していることを新聞記事で知り応募、有給休暇を取って参加。

《NGO時代》 パキスタンから帰国後、その年の年度末で会社を退職。パキスタン選挙監視でお世話になったNGO「インターバンド」で、カンボジア選挙監視ミッションのコーディネートの仕事を始め、その後、組織運営に携わる。また、「インターバンド」がメンバーとなっていたアジアの地域NGO「アジア自由選挙ネットワーク（ANFREL）」へ派遣され、インドネシア及び台湾で選挙監視活動に携わる。

《大学院留学》 奨学金の関係でオーストラリアの大学院へ留学。大学院では最初の1年で理論を学び、2年目に入る前の夏休みにスウェーデンにある国際機関「国際民主化選挙支援機構」でインターンシップをし、2年目は、国連暫定統治下における東ティモールでのオーナーシップの問題について修士論文を書いた。

《大使館時代》 在東ティモール日本大使館で専門調査員として経済を担当し、国家予算、貿易投資、天然資源開発等について調査し報告書にまとめた。また、国際機関を通じた日本政府の支援も担当、国際機関からのプロジェクト提案書の検討や支援プロジェクトのモニタリングなどを行った。その他、多国間政務（当時東ティモールに展開していた国連統合ミッションに関すること等）や広報も一時期担当。

《国連時代》 外務省のジュニア・プロフェッショナル・オフィサー（JPO）という枠組みで、UNDP ザンビア事務所で勤務。ガバナンス支援プログラムの立ち上げや、議会・人権委員会・CSO等への支援プロジェクトを担当。支援先との協議を通じ、支援内容と予算配分の確定、年間計画の作成、モニタリング評価及び報告等を行った。契約満了後は、家族の事情で日本へ本帰国。帰国後は、UNDP 駐日代表事務所で、第五回東京アフリカ開発会議（TICAD V）のコンサルタントとして、TICAD Vでのシンポジウム開催や広報に従事した。

3. 分科会の内容

私が携わってきた選挙監視やガバナンス等は国際協力業界のごく一部の分野であり、参加者にとって直接参考になる部分は限られてくるかと思えます。私のキャリア・パスは一例とし必要に応じてご質問にお応えしつつも、本分科会では主に下記のような内容を通し、（1）国際協力業界のキャリア・パスの多彩さを知る、（2）国際協力業界での自分なりのユニークなキャリア・パスの模索を始める、という2つを目的とします。（以下、参加者の人数や構成によって多少の変更の可能性もあります。）

- 国際協力業界の分野、職場（組織）、職種等の紹介。NGO、コンサルタント会社、JICA、外務省、国連等で、どのような分野のどのような職種が募集されているかの紹介。各組織の違い、特徴などの説明。
- 自己分析の必要性と、自己分析の方法の説明。講師が作成したワークシートを用い、参加者が自己分析の作業を行う。今までの振り返り、自分の得意・不得意や、国際協力分野に興味を持ったきっかけを思い起こし、自分がどのような分野、職場、職種に興味がありそうか、また、合いそうかを考える。但し仕事のみに着目するのではなく、自分がどう生きたいのか、ワーク・ライフ・バランス、ライフ・プランなども念頭に。
- 自己分析を通し、各々のミッション・ステートメント（目指す方向性）と、国際協力業界を目指すための行動計画を書いてみる（自分が目指す方向性と現在の自分のギャップを埋める方策を考える）。分科会内で可能な範囲で各々が発表、他の参加者からフィードバックを得る。

- 分科会での学びや気付きについて、グループで中間発表の準備。

4. キーワードリスト

(1) NGO／NPO／CSO、(2) JICA、(3) 外務省／在外公館、(4) 国際機関、(5) ODA

5. 参考資料等

(<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/>からダウンロード可)

(事前予習資料(予習用リーディング課題)はありませんが、もし可能であれば下記のサイトを見ておいて頂けると、分科会の内容がよりわかりやすくなるかと思えます。)

- 国際協力キャリア総合情報サイト PARTNER「キャリアについて考える・知る」
<http://partner.jica.go.jp/ContentViewer?prm=AboutField1>
- 国連フォーラム「国連職員 NOW!」
<http://www.unforum.org/unstaff/index.html>
- 同「国際仕事人に聞く」 <http://www.unforum.org/interviews/index.html>
- 同「国連でインターン・ボランティア」
<http://www.unforum.org/internships/index.html>

「身近なグローバル化」のすすめ方

～外国人児童生徒教育の実践を通して～

☆講師プロフィール

氏名：若林 秀樹（わかやばし ひでき）

所属：宇都宮大学 国際学部 特任准教授

略歴：

1962年生。栃木県公立中学校教諭24年間の後半15年間は外国人児童生徒教育に携わる。外国人児童生徒教育分野での支援者ネットワーク構築、初期指導教室設置などソリューションの提案、不就学対策などの活動に傾倒。2005年より宇都宮大学重点推進研究「外国人の子どもたちの教育・生活環境をめぐる問題」に関わり、2008年より「外国語特別講義 I ポルトガル語非常勤講師」を経て、2010年4月より現職。1997年4月から2011年3月まで栃木県警民間通訳人（英語、ポルトガル語、スペイン語）。著書は『教員必携 外国につながる子どもの教育』シリーズ（宇都宮大学 HANDS プロジェクト刊）ほか。



1. 仕事の内容・研究テーマ

日本には、日本語の力が十分でなかったり、発達段階必要な支援が受けられなかったりしたことが原因で、高校進学をはじめ自分のキャリア形成が阻まれている外国人の子どもが多く存在します。かれらが希望ある将来に向けて歩むために必要な取り組みは、大きく分けて次の3つがあると考えています。

- ① 進学に関する情報や学習教材・資料の提供など、子どもや保護者を直接支援する取り組み
- ② 学校教員のスキルアップや、行政の制度改革など子どもを取り巻く環境整備に関する取り組み
- ③ 一般社会に外国人児童生徒教育問題を伝え、多文化共生社会の構築に貢献するための取り組み

私は宇都宮大学国際学部にも所属し、外国人児童生徒の教育問題に取り組んでいます。一言で外国人児童生徒の教育問題と言っても様々ですが、公立中学校教諭として長年勤務したことを生かし、主に小中学校現場における諸問題に対する取り組みや、教員同士のネットワークづくりを通じた情報提供などに活動の重点を置いています。「学校現場」やそれを取り巻く教育行政は地域によって特色があり、それに伴い情報の伝え方やネットワークづくりにも理解と工夫が必要となります。あっという間に成長する子ども達に対して手遅れにならないように、経験を生かして取り組む場面がたくさんあると感じています。

外国人児童生徒教育問題が取り上げられて 20 年以上が過ぎ、現場の状況や社会の認識も様変わりしてきました。これからも効果的な実践を行うためには、経験に甘んじることなく、自分自身もスキルアップに励まなければならないという緊張感を常に感じています。

2. キャリアパス

大学では英文学を専攻し結果的には教員免許も取得しましたが、大学時代の私の頭の中は「音楽」のことでいっぱいでした。当時はまさに怖い物無しで「音楽で世の中を変えてやる」などと考えていました。レコード会社と関係を作って「次代を担う作曲家」を気取り、大学へもろくに通わない生活が 2～3 年続きました。留年の末「一応自分で生計立てなきゃ」と考え直して地元の教員採用試験を受験、折しも時代はバブル前夜で世のエリートは大企業に流れ、私のような者も教員試験に一発合格となり、「とりあえず」の感覚でスタートしたのが中学校教員としてのキャリアでした。

そんな私にとって中学校教員としての生活は、肉体的にはもちろんのこと「精神的」にも厳しいものでした。常に「集団」を重んじる風潮や、「少数派」を認める意識の弱い（と思える）体質に激しい反感をおぼえ、できる限りそんな空気に反発しました。「変わり者」のレッテルを貼られ、久しぶりに会った同期の教員からは、「あれ、まだ(教員)やってたの？」などと本気で言われました。当然、生徒や保護者からの好き嫌いも真二つに分かれ、一般的に言う「イイ先生」にはほど遠かったと思います。

しかし、「キッカケ」は音もなく表れ、私は気付かぬうちそれに身体ごと飲み込まれることになります。勤務する地域に外国人が急増し、私が外国人児童生徒教育という分野に接したのは教員 10 年目でした。新分野というのは人に指図されず創意工夫ができるのが魅力でしたが、私の心を捉えたのは親に連れられて日本という異国で生きることになった子どもたちが、必死になって自分探しをする姿でした。それからの私は、専門知識の吸収と目の前の子どもを支援することに没頭しました。それまで教員として関わった方々には申し訳ないのですが、この時初めて「仕事が楽しい」と思うことができ、教員になった自分自身をようやく肯定することができました。

大学時代は就学態度の悪さから大学事務局から何度も呼び出され、「あなたのような学生は退学してほしい」と言われていました。そのような私が、正規教員ではないとしても、大学で仕事をしている現実は不思議でなりません。しかし、落ち着いて振り返ってみると、キャリアの積み重ねに「偶然」など存在せず、音楽をやめて地元に戻ったことも、とりあえず教員になったことも、中学校という体制に反発しながらも仕事を続けたことも、全てが「必然」として「今」につながっていることがハッキリとわかります。

「就活」という言葉が当たり前になってもう何年が経つのでしょうか。物事はやがて日常化し「略語化」されることにより、人々はそのオリジナルな本質を見失ってしまうのではないかと危惧しています。一人一人の人生のキャリアには、社名などのブランドや収入では飾れない大切な要素がたくさん詰まっているはずです。私が外国人の子どもに接し初めて自分を肯定できたように、誰もがそれぞれの「必然」に導かれ、誰にも真似できないキャリアを形成できるはずだと思っています。宇宙から見れば小さな事ですが、「自分」という小宇宙を作り上げる楽しさは一人一人の中に潜在しているはずです。

分科会では、「就活」という言葉が一人歩きしている現代において、「自分探し」や「幸せ」とは何なのか、目まぐるしくグローバル化する私たちの身の回りや、日本を故郷に選んでやってくる外国人の意識や物の見方などに触れ、皆さんと一緒に考えたいと思います。

3. 分科会の内容

〈テーマの概要〉

- 現在の外国人児童生徒の状況を把握し課題意識を持つ。
- 「身近なグローバル化」が進む社会と自分はどうか関わらなければならないか考える。
- 多様化・多文化化する社会において、自分の適性や職業観について議論する。

〈テーマの背景にある問題意識〉

外国人の子どもや家族から、「日本の学校はイジメがあるから怖くて入りたくない」という意見をよく聞いた。学校に通うにあたっての不安要素が、日本人と全く同じであることが興味深い。学校を社会に置き換えれば、外国人にとって不安な社会は日本人にとっても不安であるという仮説が成り立つ。多様化・多文化化のなかで、人種や国籍を超えて個々を認め合うことの重要性がますます高まっている。

日本に移住する外国人のほとんどは、日本を第二の故郷と定め家族や周囲との日常を確立するため、仕事や生活に追われる毎日を過ごす。それは多くの日本人にとっての目的や生活そのものと重なる。少しでも豊かな日常を確立させたいと願う気持ちに、すでに国境は無くなっている。このような社会において自分「幸せ」を求めるとはどういうことなのか、一人一人が「自分」の内なる部分を探りながらキャリアを構築していく力が必要になってくる。

〈分科会の進め方〉

次のような内容を予定していますが、参加者の実情によって変更になる場合があります。

- 1) 講師のキャリア紹介を兼ねて、「中学校教員の仕事」の実態を紹介します。
- 2) 「外国人児童生徒教育のこれまで」と題し、現場の課題を共有し話し合います。
- 3) 参加者個人の興味や適性を出し合い、キャリア形成の原点について話し合います。
- 4) 多文化社会に向けた取り組みとして「国際理解教育」の授業を計画し発表し合います。

4. キーワードリスト

- 外国人児童生徒教育を通して社会全体を考えてみよう。
- 学校の国際理解教育とはどうあるべきか考えてみよう。
- 心の奥に眠っている本当の自分の声を聞いてみよう。

5. 参考資料等

- 文部科学省、H26 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況調査結果
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/_icsFiles/afieldfile/2015/04/24/1357044_01_1.pdf

6. 事前予習用リーディング課題

(<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/>からダウンロード可)

- 多文化公共圏センター年報 6号『栃木県の小中学校の現場における国際理解教育の現状と課題～アンケート調査から見えてきたもの～』若林秀樹

知る・聴く・学ぶー伝える楽しさ、むずかしさ

☆講師プロフィール

氏名：加藤 佳代（かとう かよ）

所属：神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）
外国人教育相談コーディネーター

略歴：

2006年より現職。多言語社会、多文化社会のあり方、情報の流れ方、情報拠点としての図書館の可能性に関心をもち活動中。地域における多言語情報の流通にかかわる調査研究プロジェクト委員（神奈川県国際交流協会/2004）、災害時における要援護者支援対策検討会委員（神奈川県/2006～2007）、文部科学省委託事業・横浜市立図書館における児童生徒に対する多文化多言語サービス推進事業実行委員会委員（2008）、外国人学校の子どもたちの絵画展実行委員会事務局長（2013～現在）。なお、日本舞踊の踊り手として、外国客船が横浜港に入港した際の歓迎行事などで日本文化を紹介。藤間流師範。



1. 仕事の内容・研究テーマ

学校教育・社会教育に関する相談対応が仕事です。対応言語は中国語、タガログ語、スペイン語、ポルトガル語、日本語で、中国、台湾、フィリピン、ペルー、メキシコ、ブラジル出身のスタッフ達と、二人三脚で対応しています。年間の相談件数は約1,200件。子ども、保護者、学校関係者、支援者から「日本の学校のしくみがわからない」「学校で使える多言語の資料はないか？」「先生への伝え方がわからない」「子どもが母語を忘れないために家庭でどのようなことをしたらよいか」「母語で書かれた本をたくさん所蔵している所は？」「保護者とコミュニケーションをとるには」「母国でどのような学校生活を送っていたのか知りたい」「宗教上で留意すべき点は？」といった様々な相談が寄せられます。解決に向けて、文化的背景が異なる相手から「思い」を聞き出し、こちらが伝えたい内容を説明し、理解してもらうには、表現や伝え方の工夫が欠かせません。情報量の匙加減も必要です。単なる言葉の置き換えではなく、相手の立場への配慮が求められます。外部との緊密な連携、複数の資料の吟味、鮮度の高い情報の入手も欠かせません。幸い、人と情報が行き交う「情報フォーラム」（あーすぷらざ2階、図書館機能を備えた情報のリソースセンター）の中に相談窓口があるので、それらを存分に活用した相談対応が可能です。「相談に来た人が、さらに一歩踏み出すにはどうしたらよいか」を考えながら仕事をしています。

2. キャリアパス

もともと中国語の通訳を目指して勉強していました。仕事で中国に出張したこともあります。1991年に「横浜港ポートガイド」として採用され、日本、中国、台湾、韓国、ロシア出身の個性的なメンバーと共に通訳をしました。それぞれ得意分野も能力も様々、コーデ

ィネーターが各自の適性にあわせて仕事配分し、依頼主（横浜市）と交渉してくれたので、業務がうまく回っていました。仕事と人をつなぐコーディネーターの重要性をそこで実感します。やがて、「誰かの言葉を訳すのではなく、自分の言葉で語り、企画して実行したい」と思うようになり、1994年に「横浜市青葉国際交流ラウンジ」で外国人向けの情報提供ボランティアを始めました。これを12年間ほど続けます。途中、阪神淡路大震災がきっかけとなって、1996年に、県内の外国人相談員、国際交流協会職員、NPOスタッフと「神奈川県外国人相談窓口研究会」を立ち上げました。「いざという時のために、日頃の繋がりをつくろう」と自主的な勉強会を始め、5年間続けました。そこで得た人的ネットワークは今の相談業務に大きく活かしています。

1995年、「利用者が図書館を支え、図書館が利用者を支える」という「よこはまライブラリーフレンド（YLF）」の理念に共鳴して活動に加わります。2004年、在住外国人と図書館をむすぶ「むすびめの会」事務局に加わります。YLFの講演会に招いた小林卓氏の「多文化サービスを、言語の障害があるからといってあきらめてしまうのではなく、ハードルを低くして、エスニックコミュニティの助力を得て、出来ることから始めよう。多文化サービスは、けっして特別なサービスではない。いつも使っている図書館が、その人の居場所になってほしい」という言葉に勇気づけられ、現在まで、図書館と利用者をつなぐ様々な企画を手がけてきました。外国にルーツのある人達が図書館に何を求めているのか、地域の人材や資源を、どのように掘り起こし図書館とつなげていくのか。多様な文化的背景をもつ読者、異なる分野で力を発揮しているNPO、豊かな知識を備える司書と共におこなう活動は、驚きと楽しさに満ちています。

1996年に日本舞踊を始め、2015年に藤間流師範の免状をいただきました。舞台名は藤間卯京（ふじま うきょう）です。（主な舞台：2001年「元禄花見踊」国立劇場小劇場、2008年「藤娘」横浜にぎわい座、2011年「君が代松竹梅」国立劇場小劇場、2013年「屋敷娘」横浜にぎわい座）。

2000年頃から、地元の小・中学校のクラブ活動や授業で、日本舞踊紹介の手伝いをするようになりました。扇子や足袋や日本舞踊を見るのも聞くのも初めてで、異国の文化に触れたように喜ぶ姿を見ると複雑な気持ちになります。生まれ育った国の風土が育み磨きあげた文化を知る機会、興味を持った時に深める機会が、あまりにも少ないように感じます。伝統文化の継承にも力をいれていきたいです。

2012年3月、東日本大震災後、客船が途絶えていた横浜港に、一年ぶりに世界一周の船が入港しました。その歓迎行事で日本舞踊を踊り、以来、要請があると通訳をつけて踊りを紹介しています。

心のどこかに「核」となるものがあると、「違い」に向き合うエネルギーが生まれます。私にとって、日本舞踊はその「核」となっています。

3. 分科会の内容

外国にルーツを持ち、日本語を母語としないクラスメート、同僚、隣人は、今や珍しくありません。互いに理解を深め、関係性を一歩進めるための有効な取り組みを、図書館の多文化サービス、減災のための「やさしい日本語」、日本舞踊の表現などを切り口に、皆さんと探ります。

4. キーワードリスト

- 内なる国際化
- 図書館の多文化サービス
- 減災のための「やさしい日本語」

5. 参考資料等

- 世界とつながる子どもの本棚プロジェクト編『多文化に出会うブックガイド』読書工房、2011
- 吉田右子『デンマークのにぎやかな公共図書館－平等・共有・セルフヘルプを実現する場所』新評論、2010
- 田巻松雄「多文化共生と共生に関するノート」『宇都宮大学国際学部研究論集』第26号、2008
<http://uuair.lib.utsunomiya-u.ac.jp/dspace/bitstream/10241/6357/1/kokusai26-015.pdf>
- 宮島喬『多文化であることとは－新しい市民社会の条件』（岩波現代全書 021）岩波書店、2014
- 弘前大学人文学部社会言語学研究室『増補版「やさしい日本語」作成のためのガイドライン』2013
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/ej-gaidorain.pdf>
- 弘前大学人文学部社会言語学研究室『さくさく作成！「やさしい日本語」を使った緊急連絡のための案文集～災害時における学校や自治体からのお知らせ編』2015
<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJsakusaku/EJsakusaku.pdf>

6. 事前予習用リーディング課題

(<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/>からダウンロード可)

- 佐藤和之「やさしい日本語」『国語2』（p.40～46）光村図書出版
- 加藤佳代「ようこそ図書館へ！子どもを対象とした図書館の多文化サービス－横浜の事例から」解放教育研究所編『解放教育』No.502（p.39～48）、明治図書、2009
- 『神奈川県委託事業 あーすぷらざ外国人教育相談事業報告書 2011年度～2013年度』青年海外協力協会、2015
http://www.earthplaza.jp/pdf/forum/foreign_education/report_kyouikusoudan2011-13.pdf

2015年度国際キャリア開発プログラム「合宿セミナー」
「国際キャリア開発」事前学習資料集

発行日：2015年7月1日

発行：宇都宮大学国際学部

〒321-8505 宇都宮市峰町 350

TEL: 028(649)5172 FAX: 028(649)5171

E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

学部		学科	
学年		氏名	